

プリズム

令和8年 10月



7月28日（火）に本校にて、サマースクールを開催しました。幼児・児童・生徒16名、保護者16名が参加し、様々な体験活動や、交流、情報交換を行いました。

午前中には、手でみる博物館の館長 川又 若菜様をお招きし、「手でみる体験会」を行いました。お話の中で、「知識の量に、見える、見えないはあまり関係ない。どのように知的好奇心へ訴えるかが重要。手でみる経験を知識へつなげていきましょう。」ということをおっしゃっていました。その他に、STT体験や、iPadのアクセシビリティの学習など、楽しく交流することができました。



今回のサマースクールで触察をしたように、本校では、食べ物や建造物、生き物など、様々なものを触って、知識へと結び付けています。では、どのように触察したら良いのでしょうか。本校専攻科教諭のギミレ先生に、触察の極意を聞いてみました！

視覚障がい者は、目の代わりに手を使います。見える人が目で見て確認するように、見えない人は手で触って確認します。私は何でも触りたくなります。触らなければ、どんな物なのか分からないからです。しかし、見える人の中には、「なぜあの人はすぐに触りたがるのだろう」と不思議に思う人もいます。知っておいてほしいことがあります。それは、私たちにとって、手は目の役割をしているということです。

触察にも工夫が必要です。丁寧に優しくゆっくりと、落ち着いて行います。急いで乱暴に触ると物の形を変えたり、壊したりすることがあります。「今から何を確かめようとしているのか」を意識して手を伸ばすことが大切です。

例えば、机の上にある物を手で確認するとき、いきなり手を出して探ることはしません。まず、机の外側を手で確認し、左右の角からそっと軽く触れながら、徐々に手全体を乗せます。少しずつ手を広げながら、物を倒したり、つぶしたりしないよう慎重に確認します。机の上には、水やお茶などが入ったコップ、ヨーグルトやケーキ、粉などがあるかもしれません。どんな物があつたとしても、コップを倒したり、食べ物に指を入れたりしないように気を付けます。

特に全盲者は、物を正確に知るために詳しく触って確認します。小さな物から大きな物まで、短い物から長い物まで、さらには刃物やとげとげした物まで、ありとあらゆる物の状態や変化を把握していきます。しかし、触察には危険を伴うこともあります。鋭い物で怪我をしたり、熱い物でやけどをしたりする可能性もあります。そのため、慎重に触察することが大切です。

【まとめ】 触察は訓練の上に成り立ちます。経験してこそ上手に触察できるようになります。

☆文化祭のお知らせ☆

10月24日（土）8：45～12：00に行われる文化祭において、10：00～12：00の間、支援グッズの紹介を行います。ぜひご覧ください。